

聖書：マタイ 6：9a

説教題：天にいます私たちの父よ

日時：2018年7月1日（朝拝）

イエス様は6章1節で「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」と言われて、具体的に施し、祈り、断食の三つを取り上げて語っています。5節から二つ目の「祈り」について話が進められています。イエス様はそこで人に見られるためではなく、神に向かって祈るようにと命じています。そのため、家の奥の自分の部屋に入り、隠れたところにおられるあなたがたの父に祈りなさいと。その際、同じ言葉をただ繰り返す異邦人のような祈りをしてはならないとも言われました。では私たちはどのように祈れば良いのでしょうか。その私たちに「あなたがたはこう祈りなさい」と言って教えてくださったのが、9節から記される「主の祈り」です。

一般に「主の祈り」と呼ばれますが、これは「主が祈られた祈り」ではありません。そのことは12節に「私たちの負い目をお赦してください」と罪の赦しを願う祈りが含まれていることから明らかです。イエス様は罪を犯したことがありません。ですからこれは主が祈った祈りではなく、「主が教えて下さった祈り」です。ここに主の弟子たちのための祈りのモデルが与えられているのです。

もし、です。もしこの主の祈りがなかったらどうでしょうか。私たちはきっと自分の願いを次から次へと祈るような祈りをしたに違いありません。そしてそうする時、私たちが経験することは、途中で何かむなしくなってくる。このように祈って私の祈りは聞かれているのだろうかという気になって来る。確信が持てない。喜びが沸いて来ない。ただ独り言をつぶやいているだけのよう。そしてこれはきっと祈り方が悪いんだと思って、ある時はもっと力を込めて祈ったり、あるいは長時間かけて取り組んでみたりする。この前見たバアル預言者たちのように、自分の体に無理をさせ、犠牲を強いて、私はこれだけ本気なのです！と神に向かってアピールするような祈りもやってみる。そのように迷走してしまうのではないのでしょうか。しかしここにどのように私たちは祈れば良いのか、そのガイドが与えられています。この主の祈りは一読して分かりますように非常に簡潔です。前の7～8節で、くどくど祈る必要はないと言われましたが、まさにその通りです。そしてそうでありつつ包括的です。何を、どの順序で、どう祈るべきか、そのすべてがあります。ですから私たちはこれを暗記してスラスラ言えるだけでなく、こ

れに学ぶことが肝要です。この主の祈りに学んで私たちの日々の祈りが形作られて行くことが大切なことです。

今日はその「主の祈り」の呼びかけの部分を見て行きたいと思います。ある人は、「たったそれだけ？中身に入らないの？じゃ、今日の話はあまり意味がない」と思うかもしれません。しかし呼びかけだからと言って侮るなかれ。何においてもそうですがスタートを間違うとその後も全部間違えます。ボタンのかけ方も最初を間違えると、その後も全部間違ってしまう。最初を正しく始めることが、それに続く後の部分に決定的な影響を与えます。そういう意味で主の祈りも、この呼びかけにこのあと全体のカギがあると言えます。果たして私たちの呼びかけはどうでしょうか。「天の父なる神様」とか「恵み深い神様」などと私たちは呼びかけますが、あまりよく考えていないということはないでしょうか。大事なのはその後の具体的な祈りの中身だと考えて、呼びかけの部分は形式的にあっさり通り過ぎていることはないでしょうか。しかし実はそれが私たちの祈りを貧しいものになっているのかもしれない。ある人はこう言いました。「私たちの祈りに生き生きとした力を与えるのは神についてのヴィジョンである。」神はどういう方なのか、聖書に従って、まずしっかり仰ぐ。その時に私たちの祈りは生気づけられる。私たちが往々にして陥りがちなのは、祈りにおいて終始、自分ばかり見ているということです。私の問題、私の苦しみ、私の健康、私の将来、……。これらで心が一杯になって、口では「神様」と呼びかけつつも、実は神を全然見ていない。これでは確かに独り言を言っているのと変わらないことになりますね。そうではなく、私たちは神に祈るのですから、まず神を正しく仰ぐのです。そこにおられる神の素晴らしさ、偉大さを見つめるのです。ですから実際的な取り組みとして、昔から信仰の先輩たちが言って来たことは、ゆっくり祈るということです。急いでしゃべらない。すぐ自分の願い事を並べようとする自分を抑える。そして私がこれから祈ろうとする神はどんな方か、まずゆっくり想起する。それが祝福される祈りのカギであるということです。

さてその呼びかけとして、イエス様がこう祈りなさいと言って最初に語られた言葉が、原文に従えば、「父よ」という言葉です。これはアラム語の「アバ」に相当するもので、幼児が家庭で「お父ちゃん」とか「パパ」と呼ぶような言葉です。そしてこれは何と言ってもイエス様ご自身が祈りにおいて使われた言葉でした。イエス様より前の時代には、神に対してこのような言葉で呼びかけた人はいませんでした。確かに旧約聖書にも、神はイスラエルの父という考えはありますが、それはこのイエス様が使われた「アバ」と

という言葉に込められている親しさとは程遠いものです。神は聖なる方で、私たちとはあまりに隔たっていて、容易に近づくことはできない方。従って祈る際には荘厳な言葉をいくつも積み重ねて神の名をお呼びするのが普通でした。ところがイエス様はその神を何と「お父ちゃん」と呼んだのです。そしてその親しい呼びかけをもってあなたがたも神に呼びかけなさいと言われるのです。

これは生まれながらの人間のだけれども、このように呼べるということではありません。神は天地万物また人間の創造者であるという意味で、すべての「父」と表現されているところもないわけではありませんが、神の御前に罪を犯した人間は、神の前でさばかれるべき者、御怒りを受けるべき子らと言われています。そんな私たちが神に向かって「父よ」と呼びかけ、受け入れられることを確信して近づけるのは、ただイエス・キリストを通してです。この方を信じ、この方の十字架によって罪を赦された者のみが、さばきを恐れることなく、大胆に神に近づくことができる。そして聖書が示す素晴らしい真理は、単に私たちはさばかれず、神に受け入れられる者として近づくだけでなく、「神の子ども」という身分を与えられた者としてそうするということです。本来、神の家族における子どもはイエス様のみです。イエス様が神の「ひとり子」と言われている通りです。ところが私たちはイエス様を信じ、イエス様と結ばれることによって、何とイエス様が持っているのと同じ「神の子ども」の立場に引き上げられる。もちろんイエス様は実の子であるのに対し、私たちは養子という形で神の子どもとされたという違いはあります。しかし当時の世界において、養子縁組をされた子どもは実の子より低い扱われ方をすることはありませんでした。二人は同じ扱いを受けたのです。このことは何を意味するでしょう。それは私たちはキリストが永遠の昔から父なる神に愛されているように、そのように私たちも神に愛されている者となっているということです。一体誰が父なる神の御子キリストへの愛を推し量ることができるでしょう。神はその無限の心がなし得る最大最高の愛をもって御子を愛しておられます。ところがその神の無限の愛が今やキリストにあって子とされた私たち一人一人にもキリストと同様に注がれているのです。ですから父なる神は、その子どもである私たちの祈りを喜んで聞こうとしてくださっていますし、私たちが考える以上の祝福をもって私たちに祝福しようと私たちを見つめていてくださる。このような父なる神を私たちは祈る時、見上げているのでしょうか。もしそうなら、私たちの祈りは大きく変わって来ることになるでしょう。

原文で二つ目に出てくるのは「私たちの」という言葉です。この言葉から思わされる

ことは私は一人ではないということです。キリストにあって同じ恵みに導き入れられた多くの兄弟姉妹たちがいます。その人々とのつながりの中に、交わりの中に、自分は置かれている。その人たちは天の御国においてともに住む永遠の家族です。神の大家族における兄弟姉妹たちです。そういう祝福の中に立たせていただいていることを感謝して祈るのです。ですから私たちは祈る時、自分のことばかりではなく、兄弟姉妹のことも常に覚えるべきことをここから教えられるのです。

そして三つ目に出てくるのは「天にいますお方」という言葉です。「天」とは何でしょうか。天とは単に雲の上の高い場所という意味ではありません。この言葉が私たちに対して持っている意味は、この方の「超越性」とか「無限性」とか「全能性」とか「永遠性」ということです。つまりこの方は私たちの父と言っても、普通の意味での父ではないということです。天の父なのです！私たちは「父」と言うとなんか何を思い浮かべるでしょうか。やはりそれぞれが地上で持つ人間の父だと思います。人間の父は父なる神の写しでもあり、私たちを育てるために心血を注ぎ、愛を傾け、養育をしてくださいました。私たちはそのことを感謝し、聖書が命じているように敬うべきです。しかし一方で人間であるため、様々な限界や欠けもあります。かえって聖書の神を考える上で妨げとなるということさえ起こります。そういう地上の父のイメージだけで考えないようにしなければなりません。私たちが祈りにおいて仰ぐべきは「天にいます父」です。この方は全世界を造り、これを支えておられる全能者です。全知全能の賢い知恵と比類なき力とによって一切を支配しておられる絶対主権者です。罪とは何の関わりもない、清くて愛と義に満ちておられる方です。この方を見上げて「天にいます私たちの父」と呼ぶのです。

このことは私たちの祈りに次の2つの要素を加えます。一つは敬虔な恐れをもたらすということです。時々、神に対して妙な馴れ馴れしさをもって祈る人を見かけることがあります。まるでその辺の友達にしゃべっているかのような話し方。ほとんどタメ口。初めて聞く人は、そんなに親しく祈れるなんて霊的な人だと思ってしまうかもしれません。しかしそれは聖書に見られる信仰の先輩たちの祈りとは異なります。アブラハムもダビデもソロモンも、また新約のパウロも、そんな祈りはしていません。親しさの中にも絶えず畏敬の念と厳粛さが満ちています。パウロが「私はひざをかがめて父の前に祈ります」と言ったように、あるいはモーセが足のくつを脱いで祈ったように、天にいます方を正しく見上げるなら、ふさわしい畏れ敬いがそこに見られるべきだと思います。そしてそうする時、もう一つの違いが生じて来ます。それは一層の大きくて深い喜びが私たちを

支配するということです。私たちが祈っている相手は全能者です。そのお方を私たちは私たちの父として持っています。このことを真に見上げるなら私たちの一切の思い煩いは小さなものになって行くのではないのでしょうか。なぜなら私の毎日の生活は私を愛し、私を子どもとして育んでくださっている全能者の愛の御手の下にあると知るからです。たとえ今、自分に悩みがあっても、あるいはたとえ何か大きな失敗をしたとしても、自分の人生を悲観的に見る必要はありません。なぜなら私たちの小さな考えをはるかに超える知恵と偉大な御力とによって、すべてを御心のままに導き、最後の栄光まで私たちを導いてくださる父なる神がいるからです。この全能の父を見上げ、信頼する時に、私たちは根本的な言い知れぬ平安と安心とをいただくのです。そして自分の人生を肯定し、感謝しながら、この方に祈り、信頼して従う歩みを進めて行くことができるのです。

イエス様はこのような神を見上げて、まず「天にいます私たちの父よ」と呼びかけなさい！と私たちを招いてくださっています。私たちにはこの方への直通電話、ホットラインが与えられているようなものです。この世の父は、時に忙しくて、なかなか話しかけても相手にしてもらえない時があるかもしれません。「今は忙しいから、また後で」と言われることがあります。しかし天の父は違います。父なる神は今に至るまで休むことなく働いておられますが、私たちはこの方への直通電話を与えられているのです。呼びかけるなら、いつでもこの方はその子どもたちの声を聞き、会話するための時間を持っていてくださるのです。

私たちの祈りはどうでしょうか。私たちはこの神を見上げず、急いで自分の願いを述べることに突進していないのでしょうか。そのことが私たちの祈りを貧しくしていることはないのでしょうか。私たちの祈りに生き生きとした力を与えるのは神についてのヴィジョンです。私たちはイエス様が与えてくださったこの祈りのモデルに沿って祈りたいと思います。この呼びかけの一つ一つの意味を想起しながら祈り始めたい。「父よ」、また「私たちの」、そして「天にいます方」。そうして祈りを通して神と交わり、神に豊かに導いていただける天の父の子どもたちの特権ある歩みへ進んで行きたいと思います。